

ポストモダン・カルチャーのゆくえ

中 野 弘 美

序

西欧文学におけるモダニズムの系譜をたどりながら、後藤明生氏は現代文化が産みだすメディアとメッセージの二項対立を脱構築してみせてくれた（後藤, 2002）。この論考は後藤氏の言説を触媒としながら、ポストモダン・カルチャーの輪郭を素描するささやかな試みである。

I

はじめに用語の定義をしておきたい。モダニティとポストモダニティは歴史上の特定の期間を区切る指標であり、社会編成の制度的特性を指す抽象概念である。例えば、モダニティは、中世以降の産業資本主義の勃興と、国民国家（nation states）体制の誕生によって刻印される。これらの制度と連動して個人主義・物神化（commodification）・都市化・合理化・官僚主義・監視網（surveillance）などの社会的プロセスが展開することになる（Giddens, 1990）。

一方、モダニズムとポストモダニズムは文化的・認識論的概念である。モダニズムとポストモダニズムは芸術上の様式やムーブメントばかりでなく、わたしたちの日常的な経験にも関与する。モダニズムとポストモダニズムの弁別は容易ではない。例えば、近代的な生の経験のなかには生活リズムやペースのスピード化とそれに伴うリスクの増大、留まることのないライフスタイルの変化や絶え間ない知の更新といった

事柄が含まれるが、断片化する生活や曖昧で不確定な世界のなかで、絶えず個々人が自分自身を振り返り、自らの内側と向きあわねばならない状況といったものは、ポストモダニズムの特徴でもある。あえて差異化すれば、偶然性の強調・アイロニーの重視・文化境界線の不鮮明化などはポストモダニズム特有の現象であるといえる。また、モダニズムは前衛芸術と大衆文化を区別したが、ポストモダニズムはそれをしない。言い方を換えれば、真なるもの（the real）とその模造（simulacra/copies）という構図は、後者において解体されるのである。なお、「ポストモダン」（名詞／形容詞）という用語を使用する場合、本稿では文化的・認識論的概念に比重をおいている。

認識論的領域でモダニズムが関与してきたのは啓蒙の哲学であった。啓蒙の哲学は道具的理性・科学的知識・普遍的真実・進歩の観念などから構成される（Lyotard, 1984）。ポストモダニズムはこれらのカテゴリーに異議を申し立てる。現実の深層ではなく表層を、唯一の真実ではなくさまざまな真実を、客観性ではなく共通の利害が生む連帯意識を、普遍性ではなく歴史的に特殊な真実の形態を、ポストモダニズムは評価しようとする（Rorty, 1989; Foucault, 1972, 1973）。リオタールはこのような哲学的立場を「ポストモダン」と呼んでいるが、フーコーは啓蒙の哲学に賛成／反対いずれかの立場をとる必然性に疑義を抱いている（Foucault, 1984）。ローティ

もまた、ポストモダンという用語の使用に積極的ではなく、ニーチェにその系譜の祖をおく「ポスト啓蒙主義哲学」(the post-enlightenment philosophy) という概念を支持する。さらにギデンズは、ポストモダン・カルチャーを「ラディカルなモダニズム」の一表現だと捉えている (Giddens, 1990)。

仮にポストモダニズムを特徴づけるもののほとんどが、モダニズムのうちに存在していたとしても、重大な文化的変容が現代生活のなかで起こっていることに疑問を差しはさむことは困難である。その意味でわたしたちはポストモダンの時代を生きているといえるわけだが、それはモダニズムとの断絶を意味するというより、未来の輪郭を素描する移行の時期なのである。したがってポストモダンを「感情の構造」(Williams, 1981)、あるいは一連の文化実践を指すものと考えたほうが生産的である。ポストモダンの感情構造としては次の事柄が挙げられる。

- 1) 感性の断片化、あるいは曖昧で不確実な生活感覚。
- 2) 偶然が世の中の核心にあるという自覚。
- 3) 文化的差異の認識。
- 4) 生活リズムやペースの加速化。

伝統的宗教という信念体系の確実性をもちにくい現代生活とは、選択を繰り返す寄る辺なき生きかたでもある。わたしたちはより内省的に自己と向きあう一方で、最終的な拠り所を見いだせないままである。このような生きかたは、社会関係についての知識や情報を生の構成要素として絶えず渴望すること、すなわち自己監視 (self-monitoring/reflexivity) の欲望を活性化させる。セルフモニタリングは「経験についての言説」でもある (Gergen, 1994: 71)。それをおしてわたしたちは自己をめぐる言説の網の目に参入し、多層的なアイデンティティを構築する戯れのなかを浮遊することになる。経験につ

いての言説はさらに、わたしたちとは異なる者たちの生きかたとの比較・検討を要請する。言い換えれば、モダニティがその「大いなる物語」のうちに隠蔽してきた多様な差異が、声を獲得しつつあるのだ。ポストモダン・カルチャーの経験は、階級・エスニシティ・ジェンダー・国民性などを無視して語るができない。人間集団に関するより緻密な分析をとおしてのみ、この文化の多様な経験が説明可能となる。

セルフモニタリングは「既に語られたこと」についての感覚をアイロニックに刺激する。それは、わたしたちがもはや新しいものを生み出すことができず、既に在るものと戯れるだけだという価値判断でもある。アイロニーはポストモダン・カルチャーの中核的感受性を構成するだけでなく、特定の文化や価値観が偶然性のうえに成立しているという理解を助長する。この文化が、例えば、映画史・音楽史・文学史に極めて自覚的であるという事態にも自己・監視は表れている。セルフモニタリングは、企業組織の場合、労働力・消費者・顧客などについての知の拡充をめざす。それはショッピングモールの監視カメラや、生産ラインの品質管理や、マーケティングの精緻化のなかに体现する。

ラッシュはポストモダンへの転回を、言説 (the discursive) からイメージ (the figural) へのシフトのなかに見る (Lash, 1990)。モダニストはイメージより意味を優先しながら、極めて知的な認識を唱導し、送り手と受け手の乖離を意図的にはかった。ポストモダニストはビジュアルを重視し、合理的理解に異議をととなえ、送り手と受け手の距離を極小化しようとする。イメージの氾濫とともに都市生活はより美的になり、読者／観客の機能の増大とともに、前衛と大衆というモダニズムの文化的境界は曖昧になっていく。高級な文化と低俗な文化、あるいは文化と産業といった棲み分けもまた崩れていく。ポピュラー・カルチャーが多く研究者の視野に入り、調査対象としての地位を向上させたことと相俟って、ハイカルチャーとローカルチャ

一の二項対立はもはや無意味になっている。「ハイカルチャーとはもうひとつのサブカルチャーにすぎない」(Chambers, 1986: 194)のである。このような傾向を説明するのがアクティブ・オーディエンスの概念である。この考え方は、意味の受け手であり、消費者であるわたしたちが、芸術や商品の意味の生産にダイナミックに関与する可能性に着目する。これによって、大量生産物を無批判に消費する大衆とその文化、という枠組みは死刑を宣告される。

ポストモダン・カルチャーは歴史性を曖昧にする。過去と現在の表象はブリコラージュ (bricolage) をとおして併置される。ブリコラージュは無関係とされる複数の記号を同じ場所に設定することで、新たな意味のコードを生み出す技法である。文化の表現形式としてのブリコラージュは、ポストモダン・カルチャーの主要な文法であり、建築・映画・テレビCM・ミュージックビデオなど多様な文化テキストに認めることができる。ショッピングモールにはさまざまな時代の建築様式が混在し、MTVは異なる時代と空間をポップミュージックのなかにブレンドする。『ブレードランナー』や『ブルーベルベット』では、映画ジャンル自体が攪乱され、ノワールやホラーやSFといった複数のジャンルが混在する。さらにこれらの映画ではコードが二重化されており、映画通でも一般の観客でも共に堪能できるように創られている (Jencks, 1986)。このような事態を「自意識的な相互テキスト性」(a self-conscious intertextuality) と呼ぶことも可能であろう (Barker, 2000: 154)。そこでは一つのテキストが別のテキストのなかに引用される。フィルムノワールの約束事を再加工した『パルプフィクション』、ロードムービーをリサイクルした『ワイルド・アット・ハート』や『トゥルー・ロマンス』は確信犯的な相互テキスト性の好例であろう。それらはまた文化生産物の機能やその歴史性について、文化的な自意識が過剰に反応していることを示すものでもある。

II

イメージのヘゲモニックな伸張と相俟って、高級芸術と大衆文化の境界が攪乱され、文化と産業の壁が崩れてくると、都市生活を美的に洗練しようとする動きが大規模に進む。フェザーストーンによるとこの動きは三つの主要な形態をとる (Featherstone, 1991)。

- 1) 芸術と日常生活の境界線を抹消しようとするアート重視のサブカルチャー。
- 2) 生活そのものをアートに変容させるプロジェクト。
- 3) 日常すべてを記号とイメージの流れのなかに投げ込むこと。

日常の美的改造と自分らしさの構築は消費文化のなかで結合する。それはイメージや象徴を消費するライフスタイルの構築をとおして実現される。このような事態は、工業化社会から消費社会への移行とももちろん無関係ではない。市場全体にたいして規格品を大量生産するフォードイズムから、ニッチ・マーケット向けの商品を注文に応じて小規模に生産するポスト・フォードイズムへのシフトは、変化に適合しうる生産システムの順応性や流通パターンの個人化傾向と連動している。

このようなライフスタイルの中心にテレビジョンがある。テレビはさまざまに縫い合わされたイメージのカラーージュを生産し、循環させる。多彩なイメージの併置は電子映像のブリコラージュを構成しながら、予想外の連想・連合を産出しつづける。番組とCMの途切れることのないフローと多チャンネル化にたいし、視聴者はザッピング——コマースを飛ばしてビデオにとったり、リモコンを使ってチャンネルを素早く変えること——等を駆使してテレビ・テキストを横領／流用する。

芸術におけるポストモダニズムは、モダニズムに対する否定的反応としての側面が大きいが、

テレビにおけるポストモダニズムは、世俗化したモダニズムの遺産を流用することに長けている。一見無関係なイメージを併置するモンタージュ、フィルムやテープを矢継ぎ早に編集するラピッド・カッティング、時間的前後関係を故意に入れ替える物語形式（この技法はニュース報道にも借用される）、シンボルやイメージを従来と異なる文脈で使用する技法などは、ポストモダンのテレビのスタイルとして定着している。

『ツイン・ピークス』は刑事物・SF・ソープオペラなどのジャンルが混在するテレビドラマであり、視聴者はこのシリーズを、時にシリアスなものとして、時にユーモラスなパロディとして愉しんできた。ドラマのテキストが生み出す多彩な色調や音色には、哀愁を誘う力と同時に、滑稽なほど風変わりな誇張がある。そのため視聴者は自らの主体の位置を目まぐるしく切り替えなければならない (Collins, 1992)。『ツイン・ピークス』は過剰な記号に溢れたポストモダン・テキストであり、事件や犯罪の解明や物語の進行に「無関係」な意味が、随所に鑲められている。

またアニメに関しては、『シンプソンズ』と『サウスパーク』が挙げられよう。『シンプソンズ』では、親子の役割が機能不全に陥っている家族がアイロニックな主人公として登場する。テキストは子供にも大人にも愉しめるようコードが二重になっている。このドラマは娯楽であると同時に、中流白人の生活文化を精妙に映し出す鏡でもある。この一家の暮らしがテレビを中心に回っていることは象徴的である。視聴者は他のテレビ番組や映画を意識するよう仕向けられ、相互テキスト的な言及に晒される。例えば、シンプソン家の子供たちのお気に入りのアニメ、『イチとスクラッチ』は『トムとジェリー』のパロディに他ならない。わたしたちがテレビ番組の暴力描写を非難しながら、密かに愉しんでいるというダブルスタンダードな態度を、このエピソードは暴露する。

ある対象にたいして相反する感情をもったり、アイロニックな感覚を抱くというポストモダニスティックな特質を、同じように有しているのが『サウスパーク』である。このアニメは文化的なステロタイプを徹底的にパロディにする。わたしたちが会うのは、偏狭な人種差別主義者や性差別主義者であり、人種やジェンダーや世代や身長・体重をめぐるさまざまな偏見である。テキストはそのようなステロタイプに足払いを食わせ、嗤いとばそうとする。例えば、この町の食堂のシェフはセクシーなソウルシンガーでもあるアフリカ系アメリカ人で、「サウスパークのバリー・ホワイト」と呼ばれているのであるが、視聴者は、バリー・ホワイトという「オリジナル」な人物像自体がステロタイプであることに気づかされる。ここにアイザック・ヘインズの声が加わって相互テキスト性はさらに強化される。というのも、黒人俳優に紋切り型の役を演じさせる映画ジャンルの傑作、『シャフト』の有名なテーマソングを唄っているのがこの声だからである。『サウスパーク』はすべての人物を傷つけながら、その偏見の足元をすくうということを同時にやっつけてのけているのだ。

III

『サウスパーク』にたいする評価が真っ二つに分かれるのと同様に、ポストモダン・カルチャーが評価すべきものか否かについても意見は決裂している。現代文化は深みがなく無意味だという者もいれば、正統派に逆らう文化の新しくポピュラーな形態だと歓迎する者もいる。ボードリヤールは、ポストモダン・カルチャーが記号表現のたえまない流れをとおして構成されると論じる (Baudrillard, 1983)。そこには記号内容の階層的序列はなく、フラットで表層的な一次元の世界が広がる。それは、いかなるものも本質的な価値や深い意義をもちえない文化であり、ものの価値は象徴的な意味——地位や権威や社会的名声——の交換をとおして決定され

る。ものから離れ自由に浮遊する記号は、例えばテレビCMのようにさまざまな文脈で連結される。「消費を使用価値、すなわち物質的な有用性の購入・使用であると理解してはならない。それは第一に記号の消費なのである」(Featherstone, 1991: 85)。

ボードリヤールが描くのは、本当のものと紛いものの区別、公私の弁別、現実と虚構の差異が崩壊した文化であり、魅惑的なイメージとシミュラクラがあらゆる領域に溢れだす世界である。それはわたしたちの心身を過剰な情報やイメージで収まりきれなくさせるハイパーリアリティの世界でもある。「ハイパー」という接頭辞は「現実よりリアルだ」ということを含意する。「現実」はあるモデルにしたがって生産される。そのモデルはあらかじめそこに在るものではなく、現実を人為的に再生産したものにほかならない。本物とコピーとの境界を壊すようなプロセスは、あらゆる領域で作動している。実際に起きた社会的事件と、それを伝えるメディアの関係は典型的な例であろう。報道番組は事件の状況を「ありのまま」に伝えていると称するけれど、どのように表象するかという命題は、メディア固有の文法・慣例・約束事に規制されるだけでなく、視聴者が咀嚼しやすいように加工さえされる (Fiske, 1987)。

ジェイムソンはボードリヤールに触れながら、ポストモダニズムが現在についての表面的で深みのない感覚に関与し、歴史的な理解の欠如を示していると論じる (Jameson, 1984)。ポストモダンのハイパースペースのなかでは、わたしたちは自分自身の居場所を定位することができない。この空間は次のような特質をもつ。

- 1) 過去から現在にいたるスタイルが共食い (cannibalization) の状況にあること。
- 2) 信頼のおける表現形式よりパステイッシュが好まれること。
- 3) 世界の表象がイメージとスペクタクルに移行したこと。

- 4) 高級な文化と低俗な文化の区別が崩壊したこと。
- 5) オリジナルの存在しないシミュラクラ/コピー文化であること。
- 6) 歴史をイメージとしてノスタルジックに表象すること。

ジェイムソンの論じるポストモダンの世界は、断片化・不安定性・方向感覚の欠如などを特徴としており、ボードリヤールとの共通点も多いが、状況の説明に関しては意見を異にする。ジェイムソンにとってポストモダニズムとは、国境を越えて拡大する後期資本主義の世界システムを表現したものに他ならない。つまりそれは、地球規模の空間で稼動する資本主義の文化形態を表象したものなのだ。後期資本主義こそが、わたしたちの暮らしのあらゆる領域に物神化を流布し、現実をイメージとコピーに変容させたのである。

ボードリヤールやジェイムソンと対照的に、キャプランは、ポストモダン・カルチャーの逸脱的役割と進歩的側面、そしてあらゆる壁や境界線の解体機能を評価する (Kaplan, 1987)。例えば、ミュージックビデオのなかには、脱構築的な手法を使って、視聴者に安定した物語形式を味わう場を与えないばかりか、現実の表象という認識論的前提に異議を唱えるものがある。この現象は、ポストモダニズムが表象の概念全体を問題視すると論じるハッチオンの主張と共鳴する (Hutcheon, 1989)。ポストモダニズムはアイロニックな知の地平であり、自らの知の限界と条件を探求しようとする運動に他ならない。またコリンズは、個々の人間のとりうる多層的な主体の位置やアイデンティティを、ポストモダニズムが戦略的に承認すると述べている。コリンズによると、ジェイムソンの描くポストモダニズムの性格描写では、「分節を可能なかぎり繰り返すこの文化の戦略的多様性を説明しきれない」(Collins, 1992: 333)。さらにチェンバーズによれば、ボードリヤールが深みのない文

<i>Modernism</i>	<i>Postmodernism</i>
Form (closed)	Antiform (closed)
Purpose	Play
Design	Chance
Hierarchy	Anarchy
Art object/Finished work	Process/Performance/Happening
Distance	Participation
Centring	Dispersal
Paradigm	Syntagm
Depth	Surface
Interpretation/Reading	Against interpretation/Misreading
Signified	Signifier
Narrative	Antinarrative
Determinacy	Indeterminacy
Transcendence	Immanence

(Adapted from Hassan, 1993, p.152)

化の主要な構成要素であると断じた「商品 - 記号」(the commodity-signs)は、実際には、消費者の多層的なアイデンティティを構築する素材を提供しており、消費者は商品 - 記号を選び分け並べ替えながら、自らのパーソナルなスタイルを築いている (Chambers, 1990)。

結

より民主的で開かれた文化へと向かう傾向が、ポストモダン・カルチャーにはあると認める研究者は少なくない。それはエリート主義的で閉じたモダニティとは一線を画すものであろう。しかし、既に述べたように、モダニズムが有する特徴や原理の多くをポストモダニズムは受け継いでいる。イーハブ・ハッサンは、文学理論から建築・絵画・音楽・哲学・人類学・精神分析学の諸領域へと拡散するポストモダニズムの基本的構成要素を、モダニズムと比較しながら列挙している (Hassan, 1993; 上の表を参照)。ポストモダン・カルチャーの内部で差異化と脱中心化が進み、さまざまな声が歴史的な文脈を踏まえながら競いあうのは望ましい。そうした

「対話的な原理」が健全にはたらくとき、支配的な信念体系のまわりに構築される階層序列的で閉じた文化は、徹底的に相対化されるだろう (Bakhtin, 1981)。権威と、それを支える「大いなる物語」に異議を申し立てること、そして、社会的諸関係を構成する差異と多義性を創造的に受容することが、ポストモダン・カルチャーといまだ見ぬ未来の文化を繋ぐ鍵となることだけは確かである。

文献一覧

- Bakhtin, M. (1981) *The Dialogic Imagination*. London: University of Texas Press.
- Barker, C. (2000) *Cultural Studies: Theory and Practice*. London: Sage.
- Baudrillard, J. (1983) *Simulations*. New York: Semiotext(e).
- Chambers, I. (1986) *Popular Culture: The Metropolitan Experience*. London: Methuen.
- Chambers, I. (1990) 'Popular Music and Mass Culture' in J. Downing, A. Mohammadi and A. Sreberny-Mohammadi (eds.) *Questioning the Media*. London: Sage.
- Collins, J. (1992) 'Postmodernism and Television' in R. Allen (ed.) *Channels of Discourse, Reassembled*.

- London and New York: Routledge.
- Featherstone, M. (1991) *Consumer Culture and Postmodernism*. London and Newbury Park, CA: Sage.
- Fiske, J. (1987) *Television Culture*. London: Methuen.
- Foucault, M. (1972) *The Archaeology of Knowledge*. New York: Pantheon.
- Foucault, M. (1973) *The Birth of the Clinic*. London: Allen Lane.
- Foucault, M. (1984) 'What is the Enlightenment?' in P. Rabinow (ed.) *The Foucault Reader*. New York: Pantheon.
- Gergen, K. (1994) *Realities and Relationships*. Cambridge, MA and London: Harvard University Press.
- Giddens, A. (1990) *The Consequences of Modernity*. Cambridge: Polity Press.
- 後藤明生 (2002) 「メディアの時代の『メディア』, または『形式』の行方」, 『横浜経営研究』第22巻, 第4号.
- Hassan, I. (1993) 'Towards a concept of Postmodern', in T. Docherty (ed.) *Postmodernism A Reader*. London: Harvester.
- Hutcheon, L. (1989) *The Politics of Postmodernism*. London and New York: Routledge.
- Jameson, F. (1984) 'Postmodernism or the Cultural Logic of Late Capitalism', *New Left Review*, 46.
- Jencks, C. (1986) *What is Post-modernism?* New York: Academy/St. Martins Press.
- Kaplan, E. (1987) *Rocking Around the Clock: Music Television, Postmodernism and Consumer Culture*. Boulder, CO: Westview Press.
- Lash, S. (1990) *Sociology of Postmodernism*. London and New York: Routledge.
- Liotard, J.-F. (1984) *The Postmodern Condition*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Rorty, R. (1989) *Contingency, Irony and Solidarity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Williams, R. (1981) *Culture*. London: Fontana.

[なかの ひろみ 横浜国立大学経営学部助教授]